

第三幕 「去りゆくもの、生まれてくるもの」

休憩の間に、観客の目の前で、ステージ・クルーが装置や小道具を配置する。舞台に一〇個ほどのボックスが置かれ、椅子として使われる。ここは墓地で、円柱は墓石でもある。

休憩時間の終わりごろに、俳優が登場し、所定のボックスに座る。最前列には、舞台中央寄りに空のボックスが一個、その隣にお岩、お槇の順。

二列目には、ほかの人に交じって、お色（茶屋女将お政）、三、四列目には納豆売り、豆腐売り、ジュリエットたち、三人姉妹、ウイングフィールド家の母と娘がいる。

死者たちはマスクをかけている。マスクは顔半分を覆う、いわゆるハーフ・マスクがよい。マスクは感情を表現していてもよい。つまり人格が現れていてもよい。俳優は、マスクの下の

顔に化粧をしたほうがいい。肌の色、口ひげ、口紅などをほどこしている。

舞台監督　さて、あれから二年半がたちました。江戸の町もかなり変わりました。

上方からいろいろな食べ物やファッションが入ってきて、江戸が少しずつ様変わりを始めました。(人口も増え、ここ深川では十年前に比べて、○○人増え、○○○人になりました。)

江戸に鰻屋が店を開いたのは、一七七〇年代ですから、この墓地に眠る人たちは今のようナギの味をまだ知らなかったはずです。

特に大きな変化は、新しい堀が掘られ、大掛かりな埋め立て工事が行われるなど、積極的な町づくりが進められたことです。ここ亀戸や砂村などは大根、ネギ、ナスなどを提供する重要な農産地だったのです。一七〇二年ももう終わりに近づいています。そろそろ赤穂の浪人たちが吉良邸へ討ち入って、主君あさのたくみのかみながのり浅野内匠頭長矩の仇を討つのではないかとの噂が日に日に高まっています。

さて、ここは、最近造成されたお寺さんの新しい墓地で、これがご存知のお岩さん。その隣がお岩さんの赤ちゃんの墓。それからこっちは伊藤家の乳母だったお楨

さん。伊藤家のわがまま御嬢様のお梅さんのために、危険な仕事も嫌な顔一つしないで引き受けになった。それから伊藤家の後家さん、すなわちお梅さんの母親のお弓さん。本当に薄幸な女性でした。

ほかにもまだ大勢の町の人たちがここに葬られています。あそこには、外国からのゲストの方がおやすみになる墓が用意されています。

親、兄弟、子ども、親戚などがお世話になっている墓所は、心の傷を癒してくれます。

気も狂わんばかりに悲嘆にくれた人々が、身内のものをここへ運んできます。そして時が経っていきます。晴れの日、雨の日、雪の日もここで大事な人たちが休んでいてよかったなど、思える場所でなければなりません。

私はこう思うのです。人間は薄情で、だんだん墓参りにもゆかなくなる。命日も忘れてしまつてね。それは、死んだ人も同じです、私たちのことをいつまでも覚えていてくれるわけではありません。魂が肉体を抜けだす瞬間の苦しさや悲しさだって、目を重ねるにつれて薄れていくものです。恋しい人、敬愛する人、憎んだ人への追憶も、また生前持っていた野望や、煩惱や、独占欲も、ここでは、ゆっくり、ゆっくりと色褪せ始めます。ところが四九日を境目に恐ろしいほど速いスピードで、ページを繰るような速さで思い出や感情が飛び去っていくのです。思い出がすべて消え

去ったとき、死んだ人には何が生まれてくるのでしょうか？　きっと何かすごく大切なもの、偉大なものが誕生すると信じているに違いありません。おだやかで、心がぶれない、不協和音のない宇宙、その宇宙から生きている人を見守る存在へ変身するのかもしれない。お岩さん、どう思いますか。

ほら、まだ生きている人間がやってきました。あれは浄心寺の浄念さんです。新しいお墓の用意に見えたのでしよう。反対側からやってきたのは、薬売りの藤八さん。東海道や甲州街道や中山道をずっと商いをして歩く、優秀なセールスマンだとのことです。

僧浄念が舞台の後方で桶や柄杓などをそろえている。薬屋の藤八が雨傘をさして登場する。

薬売り藤八　こんにちは、住職さん。

僧浄念　や、こんにちは。さて、どなただったかな。

薬売り藤八　薬売りの藤八でございます。

僧浄念　　おお、これは、これは。お岩さんのお近くの伊藤家のお屋敷にいらつし
やった、あの藤八さん。まあ、立派になられて。薬問屋の大旦那さんになられたと
お聞きしました。何年ぶりですか。

薬売り藤八　かれこれ三年になりますか。いまは小田原で小さいけれど、東海道最高
の品数を誇る薬問屋を営んでおります。朝鮮や南蛮、オランダから到来の貴重な薬
から、ご家庭でも簡単にお使いいただける薬草も商っております。お岩さんのお葬
式には顔を出せませんでした。お袖さんの訃報を聞いた時には何としてもお線香
を上げなくてはと、小田原から駆けつけました。

僧浄念　　ありがとうございます。今日のお弔いは残されたものにとって特別つら
いのです。三月前にお姉さんが亡くなり、今度は妹さんだ。お二人とも若くて、し
かも赤ちゃんがいっしょに亡くなられからのう。

薬売り藤八　（墓石を読みながら）　榎、享年三五歳……あ、これは伊藤喜兵衛殿に仕
えていたあの乳母のお榎さんではございませんか？　すっかり忘れていた。

お榎　　奴にそばへ来られると、イラつくのですよ。

お岩　　お榎さん、我慢なさい。

薬売り藤八　その墓石は少し形が違いますね。

僧浄念　　寺ゆかりの特別の仏様が安置されているからでしょう。

ジュリエット　　私たちのこと、分かってもらえるかしら。

乳母

さあ、どうだか。でもね、何百年後には、生きている人も死んだ人も、みんながもつともつと身近になっているはずよ。

マーシャ お色さん、おまきさんがイラつく気持ちわかるわ。あの男の方には人のために生きる姿勢が見えませんが。

お色 ほんとだ。マーシャさんの人間を見る目のすごさに感心するわ。

マーシャ あたしたち、別れの軍楽隊の曲を何回も聴きました。

お色 人間は何回も別れの曲を聴くのですよね。赤穂を出るときは雅楽だった。江戸へきてからは常磐津や清本っていうやつ。あれは悲しさを三倍、四倍にするのよ。

僧浄念 ところで藤八さんの親御さんはご健在ですか？

薬売り藤八 いえいえ、もう亡くなりました。かなり前に親父とお袋が川崎のほうに越してから、疎遠になってしまいました。

僧浄念 そりゃ、親不孝というもんだ。命日には線香を上げに行きなされ。

薬売り藤八 はい。江戸での仕事が済んだら、帰り道にお寺さんへお礼に上がります。お袖さんは何で亡くなられたのですか。

僧浄念 知らなかったのですか。働いていたお店の旦那の手にかかって、亡くなったとか。旦那はお袖さんを世話になった左門さんのお嬢さんと知りながら、無理無体を言って結婚を迫っていたが、そこへ亡くなったはずの与茂七さんが帰ってきて

たので、大混乱。お袖さんはあまりの不条理に精根尽き果て、月満たぬ赤子を死産。ご自身も与茂七さんとお店の旦那の刀の前に身を投げ出して、帰らぬ人となりました。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

じゃ、これで失礼する。葬儀の列がやってきた。

上手舞台前から葬儀の列が舞台へ進んでくる。野辺の送りである。二人の男が、観客には見えない棺を担いでいる。ほかの人たちは全員白の麻の袴をつけ、蛇の目の雨傘をさしている。女性も白の麻の着付けを着ている。新しい墓の周りに棺を置く。

お色 どなたなの、お岩さん。

お岩 (さびしそうに) あたしの妹、お袖。

お色 まあ、お袖さんなの。この雨、わけがあると思っていたわ。いい雨だ。若くて、きれいな人を清める迎えの雨だ。何で亡くなったの。

お岩 お家のため。主のため。夫のため。

お色 お家のために。お父上の左門さんはお家のためにあれほど尽くされたのに。与茂七さんだって、家のため、主のため、新婚生活を犠牲にして苦労なさっていることは赤穂の人はみんな知っておりますわ。それなのに……。

死者の中の女・アマンダ　お岩さんも伊右衛門様と伊藤家のご老人とお嬢様のせい
でご苦労なさいりましたね。

お岩　　はい。生きていたときは、泣きました。恨みました。

お榎　　申し訳ございません。あたしも伊藤家のご隠居様の理不尽に、とくにお
梅お嬢様のわがままな欲求に加担した悪女の一人です。

お岩　　そんなこともありましたわね。生きていたときは、憎しみの言葉や恨み
の言葉が体の中を駆け巡っていました。頭の中では、光が飛び交い、自分を失いか
けていました。(明るく笑って)それがここへきてから、日に日に、昔の悪い言葉
や気持ちをはじめては闇の中に消えていくのです。来る日も来る日も線香花火を見
ているようでした。

不思議でした。お岩の気持ちを知らない伊右衛門様は、自分で作ったみだりなお
岩のまぼろしに追われて逃げ回っているのです。かわいそうな人。

オリガ　　伊右衛門さんもしばらくは生き続けなくてはいけないわ。生きて、生き
て、そして最後にここへたどり着く。それでいいのです。

お岩　　そうかもしれないですね。

お色　　四谷家のお二人のお嬢様は、大事に育てられた。でもお侍さんの世界は
恐ろしい。そんな御嬢さんが、二人そろって若くして亡くなるなんて……。

死者の中の女・納豆売りお京　お袖さんは、長唄のお三味線を習っていたわ。いい腕

をしているってお師匠さんがほめていらした。

死者の中の女・豆腐売り千種 赤穂からこちらへ越していらった時、長唄のお師匠さんを探していたので、杵屋の師匠を紹介したんですよ。

死者の中の女・納豆売りお京 杵屋さんにはいいお弟子さんが多いからね。

死者の中の女・豆腐売り千種 その師匠さんはうちの親戚。

死者の中の女・納豆売りお京 まあ、そうなの。

死者の中の老人 静かに。

葬列が到着する。僧浄念の読経が始まる。参列者が経に和して合唱になる。

死者の中の女・納豆売りお京 雨が降って、そのうえこの歌だ。生きていた時の愚かさを忘れさせてくれる。

お袖が傘の行列の中から現れる。白の着付けに白のハーフ・マスクをしている。穏やかな笑みをたたえている。粹で、妖精のようで、死者の暗さがない。

死者のほうを見る。生きている人を見る。意を強く持って、

歩きだす。空いている第一列のお岩の隣にかける。

お袖 (死者たちに) みなさん、こんにちは。

お色 とうとうね。お袖さん。

死者の中の女 あら、与茂七さんのお内儀。

お袖 お姉さん、しばらくぶりです。

お岩 お袖さん？

お袖 はい。お姉さん、赤ちゃんは？

お岩 ほら、お槓さんがあやしてくれているの。

お袖 かわいいわね。あら、雨脚が強くなったわ。(会葬者たちが雨に濡れるのを気にする)

お岩 最近はよく降るねえ。さあ、楽にしなさい。みなさんいい人よ。

お槓 お袖さん、はじめまして。

お岩 伊藤家にいらした乳母のお槓さん。

お袖 ああ、姉からお噂はうかがっていました。

お袖は、改めて墓地の住人達を見渡す。みんなは軽くうなずく人、手をあげる人、無視する人がいる。彼女は思い切って姉

に話しかける。

お袖 お姉さん、伊右衛門さんとはいろいろあって大変でしたね。悔やまれるのはお姉さんが一番困っていらつしやったとき、赤ちゃんのお守りもしてあげられなかったことです。

お岩 ありがとうございます。あの頃は、ひたすら生まれた町に帰りたかった。伊右衛門様との出会い、赤穂から雑司ヶ谷四谷への引っ越し。赤ちゃんの誕生で喜んだのも束の間、孫娘への溺愛に狂った伊藤家のご隠居さん、おぼこのふりをした恐ろしいお姉ギヤルみたいなお梅さんとの出会い。もう過ぎた話よね。(さざりりと話題を変えらる) お袖ちゃんはどこに住んでいたの？ 何をしていたの？

お袖 あたしね、深川法上院の前といえはわかるでしょ、三角屋敷のところで洗濯の仕事をしていたの。

お岩 若い女の子にとって、それは大変な仕事だったでしょう！

お袖 ううん。どうしても父上、姉上、そして与茂七さんの仇を討ちたいと、自分を殺して……。

お岩 まあ。

お袖 ところが、人生ってドラマよ。事件が勝手に動いていくの。かたき討ちを支援してくれるという経営者の直助さんの申し出を断り切れず、与茂七さんへの未

練をすっぱり切ろうと泣く泣くに決めたその日に、生きた与茂七さんが帰ってくるではありませんか。最初はお化けかと思いました。人のうわさでは与茂七さんの殺害計画に、直助さんが深くかかわっていたようですけど、自害してしまいましたから真実は闇の中。生きている世界は盥に乗って大川を下るような頼りなさで恐ろしさの日々でした。赤穂を出てからは、目をつむって、ひたすら盥にしがみついて暮らしてきました。

お岩　大変でしたね。

お袖　娘から妻、それから未亡人、気が付いたらややを身ごもっていました。そして月足らずのややの死産。

赤穂での温かい人の心に支えられた生活が瞬く間に崩れ落ち、孤独な闇の中を手探りで生きてきました。与茂七さんに再会して一瞬だけ闇から抜け出ることができました。それでも、次々に悲しい、恨みに思う、情けない感情や思い出が止めても、止めても嘔き出しきて、気が触れそうな毎日でした。

それが、ここへ座っていると、気持ちの起伏が平坦になり、大きな力が人生の歯車を逆転させようと作用している不安定さを感じます。一方で、何年もここにいるような死者である慣れさえ感じ始めています。お姉さん、あたし怖いのです！

お岩　そのうちに慣れるわよ。あくせくしないの。

お袖　ああ、終わったのね。帰っていくわ。待って！

お岩　　しー。

会葬者たちが帰り始める。与茂七がお袖の墓の前に来て、しばらく佇んでいる。お袖は椅子から降りて正座する。

お袖　　与茂七さんが涙を流している。手をぶるぶるふるわせて、膝を力いっぱい握りしめて。そのくらいにしなさいよ、与茂七さん、着物が破けちゃうから。ねえ、お姉さん、生きている人間ってどうしてあんなに肩に力を入れて、がむしゃらに生きようとするのかしら。与茂七さんって、あたしが、お袖が好き、殿様が好き、武士であることが好き、女房が夜の仕事をしても気にしない。そんな無茶な生き方ってあるかしら。

与茂七が立ち上がり、帰っていく。

お色　　お袖さん、あの方は、あなたを愛しているわ。どれほど深く愛しているか伝えられなくて、悩んでいるのね。あの目、あの口、泣くことも叫ぶことも忘れてしまったみたい。

死者たち　少しひんやりしてきた。雪が舞うのかしら。

悠久な静寂が舞台に流れる。舞台監督が舞台上のいつもの場所に現れる。

お袖　ねえ、お姉さん、みんなのところへ一度だけ帰ることができるとして、みんなが生きている世界へ。

お岩　ええ、そりゃ帰れるけど。

お袖　あっちへ帰って、人間の生活を繰り返してもいいのね。

お岩　あたしはすすめないわ。

舞台監督　あっちの世界へ戻ってみた人がいたけど、みんなすぐ戻ってきましたよ。

アマンド　幻滅があるだけ。

ローラ　あたしも生きている人のところへ帰ったの。気持ちに通じないの。

ジュリエット　あたしも。悲しかった。乳母もジュリエットが知っていた乳母ではなかった。

乳母　いいえ、同じだったのです。

アマンド　そうよ。あなた方が変わってしまったことに気付かなかったのよ。

お色　お袖さん、悪いこと言わないよ、そんなに甘いものじゃないのだ。

お袖　申し訳ございません。わがままを許してください。たった一回だけ、挑戦

が許されているなら、それをやってみたいのです。悲しい日でなく、一番楽しかった日に、そう与茂七さんと結納を交わした日に戻りたいわ。それなら涙やため息のない、楽しい思い出のみの一日を体験することができませうわ。

だれも返事をしない。舞台監督が諭すように語りかける。

舞台監督　そういう問題じゃないのだ。あなたは結納の日をもう一度生きるだけではなく、同時に生きている自分をも見ることになるのだよ。

お袖　はい。

舞台監督　まだ納得していないようだね。生きている人を眺めるあなたには生きている人の未来が見えているのだよ。次に何が起こり、結果がどうなるか見えているのだよ。

お袖　見えたっていいじゃない。見えることは、辛いことなの。

お岩　そう、辛いことよ。私たちにとって大切なことは過去を忘れる、過去を切り捨てて新しい未来を生きることなの。私たちは自分の昔を知っているけど、そういうものすべてを消し去ったときに新しい生活が始まるの。その時を待つことが死んだ人の仕事なの。

お色　お袖さん、愚かなことよ。後悔するわ。

お岩 どうしてもつていうなら、子ども時の、何でもない、普通の日にしなさい。

お袖 じゃ、十年前の、桃の節句の日にするわ。

舞台監督 希望の時間がありますか。

お袖 特別ありませんが、朝から始めていいですか。

舞台監督 では、朝ご飯の時間から始めよう。その日も鶯が鳴いていた。

お袖が一步前へでて、遠くを眺める。ほかの人はフリーズする。

お袖 ああ、きれいなお雛様。私たち二人に用意してくださった京都のお雛様よ。

(舞台監督がうぐいす笛を吹く) あれ、本当に鶯が鳴いている。

舞台のエリアの一部を残して、他は暗くなる。そこが四谷左門宅の居間兼台所の板の間である。

お袖 まあ、子供のころとそっくり同じ。床は鏡のように雑巾掛けされている。

ふすまには私が書いた落書きが残っているわ。みんなどこへ行ったのかしら。

舞台監督 間もなく母上が朝ご飯をお姉さんと一緒に運んでくるよ。それからお父上が講道館の稽古からお戻りになるはずだ。

戸外から豆腐屋の声が聞こえてくる。

豆腐売りの女・お京　豆腐は奈良が一番、二番目が京都祇園の二軒茶屋の豆腐だと。それにも負けないのが、赤穂の千種川豆腐。はい、二丁。毎度ありがとうございます。

お袖　町内見回りの石坂様がお豆腐を買っておかえりになるわ。

納豆売りの女・お京　豆腐屋さん、商売はいかがですか。

豆腐売りの女・千種　ぼちぼちです。

お岩とお袖の母親が居間兼食堂の板の間に現れる。

母親　さあ、お岩にお袖、お膳を持って、座りなさい。

お袖　お母様、あたしはここよ。まあお母様の若々しいこと。

母親　さあ、二人とも急ぎなさい。お父様が朝稽古からすぐお帰りになりますからね。

納豆売りの女が上手から登場し、左門家の通用口から声をか

ける。

納豆売りの女・お京 奥様、おはようございます。

母親 あら、お京さん。三筒いただきます。

納豆売りの女・お京 ありがとうございます。これから寒くなるとますますおいしくなりますよ。まいどありー。

左門が下手から登場する。納豆売りの女が下手へ退場する。

お袖 お母様、昨日用意したかんざし簪が見当たらないの。

母親 先にご飯を食べてから探さない。

お袖 でも……

母親 お袖お姫様。家はあなたの乳母を雇えるほど豊かではありません。お父様がお城へ登られたら、一緒に探してあげます。

お袖 はーい。

左門と納豆売りの女が角で出会う。

左門 おはよう、納豆屋さん。

納豆売りの女・お京 左門様もお早いですね。今日は剣道のご指導ですか？

左門 さよう。昇段試験が近づいてきたからね。

納豆売りの女・お京 今年は子どもさんが全員昇段できるといいですね。

左門 そうとも。しかし今年は女の子たちが強くてね。男の子がちよつと押し
れ気味だよ。

納豆売りの女・お京 いつでも、どこでも女は強いんですよ。ハハハハ……。

左門 (つられて笑う) ハハハハ……。

お袖 (つぶやく) お父様。

左門、家に入る。納豆売りの女は売り声を繰り返しながら上
手へ入る。

左門 ただ今帰ったぞ。

母親、お岩が玄関に飛んで出る。手をついて。
お袖はそれを見ている。

三人 お帰りなさいませ。

左門 ただ今。お岩は元気かな。

お岩 はい、父上様。

左門 お袖は幸せかな。

お袖 (突然泣き出す) はい。

左門 うム。

母親 あまりわがままなので、叱ったところなのです。朝ご飯がすんだら、みんなで菱餅と雛あられをいただきますしよ。では食事にしましよ。あなた、よろしいですか。

左門 もちろん。

母親 (みんなを急き立てて。母とお岩はお膳があるつもりで、ご飯とみそ汁をよそおう。) さあ、さあ。

左門 いただきます。

みんな いただきます。

母親 (お袖に) どうしたの。

お袖 (舞台監督に) もう、だめ。どんどん時間が過ぎていく。

母親 ご飯はゆっくり噛んで食べるのですよ。後でお菓子をたくさん食べようと

ご飯を控えてはいけません。今日の夕飯には、お向かいからいただいた蛤でおいしいお吸い物を作りましょう。それから、なれ寿司も用意しましょうね。

左門　ウム。お岩、お変わりだ。(ト　ご飯茶わんを差し出す)

お岩　はい。お味噌汁のお味はいかがですか。

左門　結構だ。

お袖　(気持ちが高まり、泣きそうになる) お母様、一寸でいいから、あたしの

顔を見てください。桃の簪かんざしのことで叱られてからもう一〇年もたったのよ。お母

様、あたしは死んだの。あたしは与茂七さんと所帯を持って、束の間だけどそれは楽しい生活を送ったの。お腹にややを身ごもったけど、お母様やお父様に孫の顔お見せすることができませんでした。だから、お母様、袖の顔を見てちょうだい。

左門　さあ、袖、ひな壇のお菓子を下げてください。

お袖　もうだめ、気持ちの流れがちぐはぐになって、顔を見合わせる暇もなければ、見つめ合う心のときめきもない。

さあ、連れて帰ってください。あたしのお墓へ。お父様、お母様、赤穂の地よ、さようなら。千種川よ、さようなら。そして伊和都比売神社よ、みんなみんな、さようなら。ああ、生きている世界ってこんなに素晴らしかったのだ。

オリガ　私たちの苦しみは、後に生きる人々の喜びに変わって、幸福と平和がこ

の世に訪れるでしょう。もう少ししたら、何のために苦しんでいるのかわかるような気がするわ。

マーシャ ああ、軍樂が鳴っている。

お袖 生きている世界って、あんまり素晴らしすぎて、だれもそのことに気づかないのかわ。生きていくことって、かけがえがないほど素晴らしいつてことに。(舞台監督に) 人生というものを理解できる人間はいるのでしょうか？

舞台監督 いいえ。

お袖が泣き崩れる。

舞台の照明が暗くなり、家族の姿が見えなくなる。

お袖 さあ、連れて帰ってください……お寺の裏のあたしのお墓へ。ちよつと待ってください。(立ち上がる) さようなら、御崎神社の鐘の音も、川面に響く木遣りの声も、神輿の声も、金魚屋さんの売り声も。家があつて、家族があつて、生きている世界って、あんまり素晴らしすぎて、なかなか気づくことができなかったのね。(舞台監督に向かって問いかける) わがままや、いじめや、憎しみや、憎悪や、狂気のみが蔓延して、一番素晴らしい平凡さを忘れてしまっているのね。

舞台監督 その通りだよ。もしわかっていたら、人生ほど退屈なものはないだろうが。

お袖 ありがとうございます。

お岩の隣の椅子に戻る。間。

お岩 楽しかった？

お袖 いいえ。お姉さんが言うとおりであったわ。人生って、すごい速さで過ぎていくのね。結納の後、しばし幸せな日が続いたかと思ったら、藩の経済が破たんし、お父上は職を失い、お姉さんの結婚は破局を迎えた。あたしは与茂七さんと生き別れ。それから仇をとるため、生きるために苦界に身を沈めなければならなかった。すべてが見えなかった。ここにきて、はじめて私の人生のすべてが、最初から最後まで見えています。

お姉さん、あたしの過去がゆっくりと遠ざかりつつあるような気がします。シャボン玉のように、きらめいて、ゆれて、消えてゆきます。長い時間をかけて小さくなり、一つまた一つと消えていきます。

お岩 あせらず、時を待つよ。ごらん、晴れてきたわ。星が出ている。

お袖 お色さん、みなさんの言うことをきけばよかったと思います。

お色 知らないというのは、実に恐ろしいことなの。人に学ばず、あのくらいなら自分にもできると思い込む。失敗すると、口をつぐみ、うまくゆくと、手柄を大声で触れ回る。自分が浮かび上がるために、小物ばかりを周りに集め、その上に乗

って生きています。賢そうな顔をして口をつぐんで、心の内を明かさないうのは自分の欲に振り回され、人の気持ちを踏みにじり、いつまでも生きていられると勝手に思い込んでいる生き物なのだ。

お岩 (やさしく) お色さん、そう思うときもありますわ。でも、いつも、みんなが、そうだとは思いたくありませんわ。あら雪が舞ってきた。

お榎 雪は不浄なもの、汚れたものを覆い隠してくれる。新しい世界を作ってくれる。

死者の中の女・納豆売りお京 雪はお袖さんのための花道よ。

死者の中の女・豆腐売り千種 そう、雪は死者の花道さ。

死者の中の女・納豆売りお京 強欲な人間の仲間が一人戻ってきたよ。

お榎 変ね。人間がやってくるような時間じゃないのに。

死者の中の女・納豆売りお京 あれ、あれはあの人でしょう。なんて言ったっけ。

お袖 (思わず声が高くなる) お姉さん、与茂七さんよ。

お岩 しっ、落ち着きなさい。そのままそのまま、じっと待つ。

お袖 あなた！

上手から与茂七が引き返してくる。ゆっくりお袖の墓の前にひざまづく。

お槇　偉い人のお屋敷の上にも、貧しい人の長屋の上にも、橋のたもとでもをかぶって休んでいる乞食の上にも、同じ雪がわけ隔てることなく降る。みんな同じ白い雪だ。

与茂七がお袖の前に崩れ落ちる。雪がさんさんと降り積もる。木枯らしの音が少し強くなる。

死者の中の女　まあまあ、純真なこと。

お色　早く家へ帰らないと。

お袖　お姉さん。

お岩　なに、お袖。

お袖　生きている人には、与茂七さんたちには、あたしたちがずっと見守っているなんてわからないのでしょうか。

お岩　そうよ、わからないわ。

お袖　あなた、与茂七さん……愛しているわ。泣きたいほど、愛しているわ。どうか、死なないでね。あたしのためにも、お腹の中で死んでしまったややのためにも、決して、死なないでね。

舞台監督が下手に現れる。彼はゆっくりと幕を閉じ始める。
遠くで時を告げる鐘（太鼓）の音が聞こえる。

舞台監督 本所深川も、本所亀戸も、ほとんどの人が眠ってしまった。雪が深々と降り続くせいか、まったく明かりが見えない。犬の鳴き声さえ聞こえてこない。こんな静謐な夜が江戸の町にあるなんて信じられない。三味線や太鼓の音も静まって、女性たちの艶のある、さんざめく声も聞こえない。

おや、雪が切れましたよ。大きな十六夜の月があちこちに姿を映している。真っ白な雪野原が月の光を浴びてキラキラと輝いている。月が小名木川の水面に触れて遊んでいるようだ。きっと浄心寺や天神様の太鼓橋の下の鏡のような水面にも十六夜の月が姿を見せているだろう。夜の雪は、みんなのわが町を癒してくれる。夜の雪は欲や妬みを慰撫し、白い世界に染め上げる。

先程、四つの鐘がなったから、わが町は一〇時を少し回ったところ。私たちはこれで休みます。一〇時は、わたしたちにとって十分に遅いのです。皆さんもお帰りになってゆっくりご休息ください。おやすみなさい。

舞台監督が歩き出す。

ゆつくりと照明が消え始める。幕がしまる。

みんなのわが町 - ワイルダーと鶴屋南北 -
のご意見をお聞かせください。

小林志郎

メール・アドレス: DQJ10334@nifty.com